

十津川温泉



元禄年間に炭焼き職人が発見したといわれる下湯を源泉としている二津野ダム湖畔の温泉地。食塩を含み湯冷めしにくい。きりきず・やけどなどにも効果がある。

食わず女房

文・山崎しげ子



十津川村の大踊り(武蔵地区)



村の3地区(小原・武蔵・西川)には、室町時代に流行した風流踊りの流れをくむ盆踊りが伝えられている。(国の重要無形民俗文化財に指定。開催8月13日:小原地区、14日:武蔵地区、15日:西川地区)。(P.17→昂の郷ふれあい物産)

昔、十津川村に、大そうけちんほうな男がいた。「飯を食わんで、よう働く嫁はん、おらんもんか」と、いつも言っていると、ある晩、男の家の戸を「トントン」とたたく音がした。

男が戸を開けると、きれいな女が立っていた。女は、「わしを嫁にしてくれんか。何も食べんでよう働くから」と言い、男は喜んで嫁にした。女は、朝早くから夜遅くまで働いた。しかし、ほんとうに何も食べない。そんな日が続いたある日、男は不

思議に思い、女には「山仕事に行く」と言いながら、そと家に帰り、障子の穴からのぞいてみた。すると、何と、女は大きなたらいに飯をいっぱい入れ、頭髪の下に隠れていたもう一つの大きな口で、ムシヤムシヤと食べているではないか。

びっくりした男は、「お前のような女はもう嫁にはできん。帰ってくれば」と言った。すると、女は「大きな桶を貸してほしい」と言い、男が用意した桶に男を投げ込み、それを背負って山へ走って行った。

男は、怯えながらも、ちようど頭の上に伸びていた谷渡りの藤のつるに飛びつき、桶から逃げた。その時、男が見た女の姿は、鬼であった。鬼の女は、男を逃がしたことを悔

しがり、「大晦日の晩に蜘蛛に化けてお前を殺してやる」と言った。

いよいよその晩、男は震えながら箆を何本も束ねて置き、囲炉裏に火を焚いた。そこへ蜘蛛が自在鉤を伝ってシューッと降りてきた。男はそれを箆で火の中に叩き落とし、退治したという。

これとほぼ同じ話は、実は東北地方から九州、沖縄まで、日本の各地に伝わっている。探せば、数え切れないほどだ。奈良県でも十津川村のほかにも五つほどの地域が知られている。ただ、各地の話には多少の違いもあり、女の正体が鬼や蜘蛛のほか、蛇、山姥であったりする。

「食わず女房」の話の背景には、人々の暮らしがまだ貧しかった時代の切ない現実があったのだろうか。

物語の場所を訪れよう

「十津川村」へは…

【車の場合】
五條市から国道168号線を南へ65km(約90分)

【電車・バスの場合】
近鉄八木駅から奈良交通バスで約3時間30分

〒十津川村
観光協会
☎0746・63・0200

